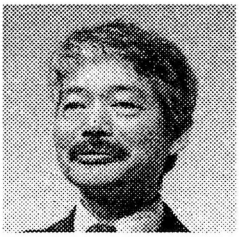
アフガン爆撃下で診療つづく
憲法9条で守られてきた安全

ペシャワール会 中村医師が報告

福岡市

「難民を出さないことが大事だ」

「ペシャワール会」の中村哲医師の言葉です。同会の支援で、アフガニスタンとパキスタン北西部に十カ所の診療所が二百数十人のスタッフによって医療活動にあたっています。



講演する中村哲医師

中村氏は二十日、福岡市で日本ジャーナリスト会議福岡支部などが開いた講演会でアフガニスタンの現状を報告。中村氏が話す現地の状況は、米国の報復戦争が、テロ根絶に役立たないだけでなく、いかに人道主義からはずれているかを浮き彫りにしました。

大干ばつによって、畑の水だけでなく飲み水に事欠き、食器を洗うこともできない…。水がなくなった農村の村々から人々が大都市に集まり、「首都カブールの人口百万人の大半は〝水難民〟だ」といいます。

「アフガニスタンの人が望んでいるのは、非常に単純で、水と食べ物、平和な家庭生活」「国外に脱出できるのは、それだけの財産がある人々で、多くの農民は、難民になることもできない状態だ」

「アフガニスタンの外に住民を追い出し、その後で人道援助するというのが、人道援助か」と語る中村氏の顔は厳しさを増します。

米国の武力攻撃が始まって以降も、カブールを含む各地の診療所は「爆撃下なにもなかったように運営されている」と語ります。「現地から毎日連絡を受けている確かな情報で、目標の大半はテロ組織となんの関係のない農村で、住民が何十人、多いときで何百人の死傷者が出ているのは事実だ」

国会の参考人質疑で、「自衛隊派遣は有害無益」と言い切った中村氏。講演後、「テロ事件を見ると、憲法九条は正しかった。世界に誇るべきものですよ。いま思うと、あれで守られてきた。これまで日本人であることは安全保障だったが、『日の丸』を降ろさないと危ない」。中村氏の言葉には、日本がなにをすべきか問いかける重みがあります。